



北九州市立大学

地域での実習が柱の「地域創生学群」を軸に 自ら課題を見つけて学ぶ学生の輪が拡張

学びのパラダイムを逆転 複数の学問を学ぶ学群制

2005年の独立法人化を機に、北九州市立大学では抜本的な大学改革に着手した。そこで表出した課題は、「公立大学として地域に貢献できていない」、「学生たちが社会に出てから求められる、実践的な能力を身につけられる授業ができていない」ことなどがあつた。

そこで「地域に根ざし、時代をリードする人材」を育成すべき学生像とし、真に地域に役立つ専門領域を学ぶ新たな学部を2009年に創設することになった。現・地域創生学群長で創設メンバーでもある眞鍋教授はこう振り返る。

「新学部を創るにあたり、まず地域の方々に話を聞きにいきました。すると『北九大は地域の役にたつてない』、『困っていることを相談すると専門外だからわからない、できないと言われる』など、とにかくお叱りを受けるばかりでした」

地域が抱える課題はひとつの専門性では解決できないことがほとんどだ。そ

こで大学のあり方を根本から変えなければならぬと考えた。

「『専門性を意識しない』ことから始めました。まず地域に飛び込み、発見した課題を解決するためにどんな専門知識が必要か考えてから学ぶのです。つまり学びのパラダイムの逆転です（眞鍋教授）」

そのために「学部」ではなく、複数の学部にもまたがる専門分野を学べる学部組織である「学群」とした。地域創生学群のカリキュラムを作成するにあたって軸としたのは、「ティーチ」ではなく学生が自ら学ぶ「セルフラーニング」にすること。「地域の日常を学生が自分ごととして同じ目線で見て考えること」だ。

学年縦断チームで週30時間 実習中心の学びを実施

カリキュラムは非常に独特だ。1年生は入学後に地域課題ごとの16テーマに分かれたチームに配属される。いずれも1年から3年までの合同チームでも実施を行う。実習では、事前準備、実際の活動、振り返り機会等、活動全体

北九州市立大学の教育改革

学校が抱えていた課題感

- 公立大学として地域貢献が不十分だった。
- 旧来の座学にとどまり、実践的な教育が進んでおらず、産業社会の変化に追いついていなかった。

目指した姿

「地域に根ざし、時代をリードする人材の育成と知の創造」
 全学共通で修得する4つの力 「自ら立つ力」「異文化と交わる力」「未来を創り実践する力」「チームで協働する力」

取り組み内容

◆大学改革 第2期(2011年～2018年度) 中期目標

「選ばれる大学への質的成長」「大学プレゼンス(存在感)」「環境・地域・アジア」をキーワードに、教育、研究、社会貢献、経営の相互連携
 ①社会を生き抜く力を備え、地域・社会をリードする人材の育成 ②優れた専門知識・学識を有する職業人・研究者の養成 ③大きな成長を促し社会への離陸を支援 ④地域からアジアへ。時代をリードする環境・産業技術 ⑤地域・社会の発展へ。地域課題に対応する調査・研究 ⑥大学が息吹く。我が街への貢献 ⑦異文化が交わるキャンパス。多様な国際化の推進 ⑧自主・自律し信頼される大学

◆地域に貢献する取り組み

①2009年「地域創生学群」創設⇒地域課題に特化しつつ、複数の部局にまたがる専門分野を学べる学部組織設置 ②2010年「地域共生教育センター」創設⇒地域創生学群の実習で行っているような取り組みを、全学部の学生・教員が参加できる組織 ③2013年「北九州まなびとESDステーション」創設⇒文部科学省の大学間連携推進事業として、北九州の10大学と連携した、実践的な地域課題解決プログラム



地域創生学群長
地域共生教育センター長
眞鍋和博教授

取材・文／長島佳子

を合計すると、週30時間にも及ぶことが少なくないという。また、実習以外で履修する専門科目が幅広いことも地域創生学群の特徴で、3分の2は他学部の科目だ。

「各学部から科目を供出してもらうことは学部にとっては負担なので、協力を

得るのは大変です」(眞鍋教授)

しかし、学群ができて8年目の今、地域から日々相談が来るほど、地域でも大学でも存在感が高まっている。

「最初は学生が地域に入っていくと、行の人手くらの扱いでしたが、教育プログラムとしての意義を丁寧に説明し



図1 地域創生学群での学び

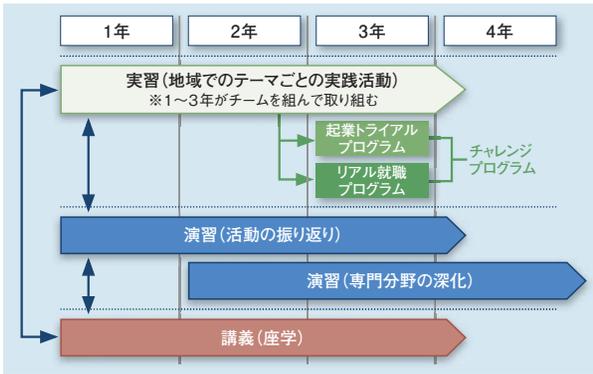


図2 地域課題解決型の取り組み

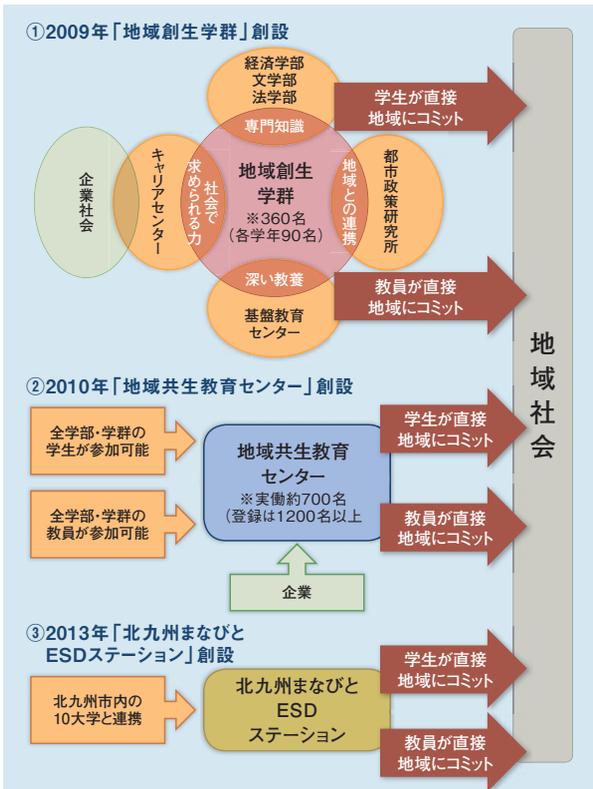


図3 各組織での地域課題への取り組みテーマ例

地域創生学群	地域マネジメントコース	「猪倉農業関連プロジェクト」農業を通じて、農村部の地域活性化 「『子どもの学び』支援プロジェクト」小学校を訪問し、放課後の学習支援ボランティア 「小倉活性化プロジェクト」小倉のまちの情報発信とにぎわいづくり
	地域福祉コース	「コミュニティワーカー実習」団地に住む独居高齢者の支援 「司法福祉実習」法に触れる行為をした少年や成人に対して、「福祉」的なアプローチ
	地域ボランティア養成	「車いすソフト」誰もが楽しめるスポーツとしての車いすソフトボールのルールの精度を高め、スポーツとして周知する取り組み 「シニア体力アップ実習」シニアの健康維持と健康増進を目的とした運動教室の企画・運営
	全体実習	「FM KITAQラジオ番組制作実習」北九州のコミュニティFM局の番組制作
地域共生教育センター		「防犯・防災プロジェクト【MATE's】」地域安全マップづくり、市内一斉パトロールなど、防犯・防災に関わる様々な取り組み 「青空学プロジェクト」北九州市の公害克服の歴史を体系的にまとめて保存する 「421Lab.学生運営スタッフ」学生の地域活動を学生がサポートする
	北九州まなびとESDステーション	「学生まちあるきプロジェクト」地域にしかない宝物をまちあるきを通して見つけるプロジェクト 「カンボジア教育支援プロジェクト」カンボジアの子どもの学びを支援 「idea+」小倉のまちをキャンパスに、講座をプロデュースする



農業のプロジェクトでは、当初は外部のオブザーバーとしての参加だったが、今ではまちづくり協議会の正式構成員として活動。

車いすソフトプロジェクトでは障がい者も健常者も年齢・性別も関係なく楽しめるスポーツの普及に貢献している。



ていきました。現在では地域と大学が一緒に学生を育てる認識をいただいています。教員の役目のひとつは地域と学生をつなぎ、地域の教育力を向上させることです」(眞鍋教授)

2014年度からは新たな試みとして、3年生の希望者が実習から離れて「チャレンジプログラム」に参加している(図1)。実際に起業体験をする「起業トライアルプログラム」と、週3、4日フルタイムで5カ月間勤務する長期インターンシップの「リアル就職プログラム」の2コースだ。これらに参加した学生の外部からの評価が非常に高く、さらなる成長の場となっている。

また、地域創生学群の学生は就活方法が他の学生と全く異なっているという。日々の実習を通して「地域をよりよ

くする」という自分のやりたいことが決まっているため、それができれば業界を問わず飛び込んでいくそうだ。

地域から求められ、学外や地域全体の取り組みへ昇華

学群以外の学生の地域貢献意欲に応えるために、同大学は2010年に「地域共生教育センター」を設立した。地域創生学群で行っている実習とは異なる地域課題の解決に向けたプロジェクトを全学部・学群の学生が参加できるもので、現在約1200人が登録し、実働だけでも16プロジェクト・約700人の学生が活動している。学生だけでなく、地域からの依頼が特定の専門分野に特化した場合は、その専門の教員を巻き込むこともあり、地域と全学が

交わる拠点となっている(図2)。

地域から学生のアイデアや能力を求められることが増えてきたことから、2013年から文部科学省の大学間連携推進事業として、「北九州まなびとESD(※)ステーション」を開設。北九州内の10大学と連携して地域の課題解決プロジェクトを多数行っている(図3)。

「この活動では他大学の学生たちの成長が顕著です。地域の人に認められることで、自尊心が高まるようです」(眞鍋教授)

今後の課題は、実習で得た知識や経験を「地域創生学」という学問として確立して広げることだという。

「教育改革の究極の

目的は「次世代にこの地球を確実に残していくこと」です。そのために、自分でシナリオを作れる人を育てなければなりません。見つけた課題を自分事として考えられなければ、実習しても意味がありません。本学の学生が取り組んでいることを、近隣の高校や大学、地域の人々にまで広げて、学生、市民がシビックプライドを持ち、地域が自立できるシステムを地域の人々自身が考えられるようになることが最終的な目標です」(眞鍋教授)

*ESD (Education for Sustainable Development)= 持続可能な開発のための教育